

『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』 における絶対的平等批判と社会改革思想批判

駿 河 昌 樹

- 1 はじめに
- 2 「非宗教的社会制度を蝕んでいる隠された傷」としての「財産の不平等」
- 3 「知性の拡大」がもたらす危機
- 4 絶対的平等 *égalité absolue* を求める社会改革理論への根源的な批判
- 5 良き共同体や良き社会の成立や維持の不可能性

1 はじめに

『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』の終わりには「結論 *Conclusion*」と題された複数の章があるが、シャトーブリアン Chateaubriand はそこで、フランス革命以来の様々な社会改革思想に対し、根源的な批判を記している。

シャトーブリアンは、フランス革命の際に反革命派として従軍したブルボン正統王朝主義の貴族であり、ナポレオン旗下に外交官としてのキャリアを開始し、王政復古とともに政治家として大臣職や重要国の大使を歴任したが、1830年の7月革命で、かつてルイ16世 LouisXVI の処刑に賛成する署名をしたオルレアン公 Duc d'Orléans の息子であるルイ＝フィリップ Louis-Philippe 1^{er} を拒否し、政界から引退した。それ以降は回想録の執筆などに没頭したため、内的には過去と向き合うばかりになったのではないかと思われがちである。

そういう彼が、73歳を迎えた1841年9月の時点で、回想録の「結論」を成す章のそれぞれに、《財産の不平等。人間の知性面の能力と物質面の能力の拡大発展から来る危険》⁽¹⁾ や、《サンシモン主義者たち。ファランステール主義者たち。フーリエ主義者たち。オーエン主義者たち。社会主義者たち。共産主義者たち。統一主義者（ユニオニスト）たち。平等主義者たち》⁽²⁾ といった副題を付している光景には、多少なりとも驚くべきものがあるかもしれない。これは、老境に到るまで、彼がヨーロッパ社会の観察者であり続けた証左であるとともに、シャトーブリアンを単なる保守反動の王党派として整理しようとするような偏見の不当性を証明する、格好の材料のひとつともなりうるだろう。そもそも、1760年生まれのサン＝シモン Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon はシャトーブリアンより8歳年上に過ぎず、1772年生まれのフーリエ Charles Fourier もシャトーブリアンより4歳年下に過ぎない。こうした社会主義者の思想や活動は、青年時代からシャトーブリアンの視野に入っていたのもである。

『墓の彼方からの回想』の「結論」は、多くの興味深い問題提示や指摘に溢れた最重要章のひとつだが、本稿では、そのうちの主要なテーマを瞥見することとしたい。

2 「非宗教的社会制度を蝕んでいる隠された傷」としての「財産の不平等」

《財産の不平等。人間の知性面の能力と物質面の能力の拡大発展から来る危険》と副題された章は、次のように始まる。

「社会はいつの時代に消滅することになるのか？ いかなる突発事件の数々が社会の動きを中断するのか？ ローマにおいては、法の支配は人間の支配へと置き換えられ、共和国から帝国へと移行した。我々のフランス革命は逆方向を辿った。王国から共和国へ、あるいは、国家形態に拘らずに考えれば、民主制への移行である。これが困難なしに行われることはな

い」⁽³⁾。

民主制への政体移行に伴う「困難」の最たるもののひとつとして、シャトーブリアンは、所有の問題に触れている。「今あるかたちで、配分が為され続けていくのだろうか？」⁽⁴⁾と彼は問う。

彼によれば、フランスが王国であった時代には、所有の問題が生む衝突の過酷さはキリスト教的な道義に適った法によって緩和されていた。こうした道義を支える根拠となる王国が消滅し、共和国や民主制に移行した以上、所有をめぐる争いの過酷さを緩和する役割を持ちうるものはなくなってしまふ。

「数100万もの収入がある人間たちがいる一方、他の者たちが飢えて死んでいくような政体は、この世の外への希望によって犠牲を説明する宗教がなくなった場合、存続していけるものだろうか？」⁽⁵⁾

これは一見、アンシアン・レジーム下に成人した貴族階級出身の人間が抱きそうな、フランス王国時代への懐旧とその礼賛に見える。おそらく、スイエス Sieyès ならば、所有の問題に関してシャトーブリアンが評価するようなキリスト教的道義の有効性を言下に否定するだろう。まさにアンシアン・レジーム下で特権者の貴族階級を批判し、彼らに属していた所有権の異常な多さをスイエスは告発していたからである。スイエスは、1789年にこう書いていた。

「フランスにおいては全てを握っている貴族と、いまだ大部分の人たちを卑しめている封建的な迷信が支配しているが、それに加えて土地所有の影響がある。所有自体は自然なものであり、私はそれを排斥はしない。しかし、所有がいまだひとえに特権者の利益になっていること、特権者が第三身分に対抗する際に、所有がその強力な支えとなるのを恐れるのももつともであることには異論があるまい」⁽⁶⁾。

スイエスが、「所有がいまだひとえに特権者の利益になっていること、特権者が第三身分に対抗する際に、所有がその強力な支えとなる」と書かねばならない状態が王国時代にあったのは事実で、所有をめぐる諸問題が

キリスト教的な道義に適った法によって緩和されていたなどとは言えない。

しかし、シャトーブリアンがさらに次のように書く時、彼は、所有ということが、単なる社会問題を超えた人間的な業のようなものとして見られるべきだと考えているのがわかる。

「教育が下層階級の中にまで下りていくにつれて、そこに属する人間たちは、非宗教的社会制度を蝕んでいる隠された傷を発見することになる。条件と財産のあまりに大きな格差は、それが隠されているかぎりは耐えられ得るものの、この格差がひろく認識されてくれば、致命的な打撃となる。可能だと思うならば、貴族というフィクションを作り直してみたらよい。貧乏ながら、立派に読む能力があり、なにも信じなくなっている者を説得しようとしてみたらいい。たとえ隣人が千倍もの余剰物を所有していたとしても、君のほうはすべての欠乏を忍従しなければならないのだと、あなたと同じ教育を受けているこの人物に納得させようとしてみたらいい。最後の手段としては、あなたは彼を殺さねばならなくなることだろう」⁽⁷⁾。

スイエスにしても、特権者としての貴族階級を排除しさえすれば、所有に関わる問題が本質的に解決するとは考えていなかっただろうが、シャトーブリアンの場合はさらに懐疑的である。貴族が消滅したぐらいでは、所有の問題は消えない。どのような社会形態においても、財はどこかに集中し、独占され、それを資本としたいっそうの増大化が企てられる。社会そのものを方向づけるそうした回路の上部に位置できない個人は、回路を滞りなく運行する歯車として生きつつ、上限の定められた少量の財の分け前で満足するか、あるいは、貧困状態を忍従するしかない。シャトーブリアンはこうした事情を「非宗教的社会制度を蝕んでいる隠された傷」と呼んでおり、フランス革命によって解決されるどころか、いっそう露骨になった人間の原罪のようなものとして捉えている。

3 「知性の拡大」がもたらす危機

一般的には喜ぶべきことと見なされがちな「知性の拡大」も、シャトーブリアンにとっては恐れるべきことと映る。

「機械が増え、その種類も豊富になって、結果的に暇になってしまうのを余儀なくされる人々の腕を想像してもらいたい。ただ一種類の機械を動かすタイプの賃金労働者が、耕作や家事に関わる労働者たちの代わりをしてしまうことになるのを考えてもらいたい。仕事を奪われた人々をどうしたらいいのか。知性がありながら、閑暇を強いられた情熱をどうしたらいいのか。体の活力は身体的な活動によって維持される。辛苦が絶えれば、力は失われてしまう。我々は、襲ってくる者があればすぐに打ち負かされ、剣を握る手に対しては防衛もできないあれらアジアの人々のようになってしまうかねないのだ。仕事が力を作り出すゆえに、自由は仕事によってのみ保たれる。アダムの息子たちに向けられた呪いの言葉を撤回してみたまえ、そうすれば、彼らは隷属のうちに滅び去るだろう。*In sudore vultus tui, vesceris pane*（おまえは額に汗して糧を得よ）⁽⁸⁾。神の呪いはかくして我々の運命の謎の中に入ってくる。人間は、自らの思想によるより、自らの汗によるほうが、いっそう奴隷状態を脱しうるのである。このようにして、社会形態の諸々を経巡り、多様な文明を経験し、未知のいろいろな完成形態を想像してみた後で、人間は聖書の語る真実の面前で、振り出し点に戻るのである」⁽⁹⁾。

ここでシャトーブリアンがいう「知性」は、工業生産を無限に合理化していくような、機械設備の生産に結実していく知性である。こうした「知性の拡大」は、一般的には社会では喜ぶべきことと考えられ、労働力の削減と生産の拡大に結びつくものとされる。シャトーブリアンは、しかし、労働者たちの側の「暇になってしまうのを余儀なくされる人々の腕」や「閑暇を強いられた情熱」の行く末に関心を注ぎながら、こうした進歩を

危ぶんでいる。

労働力を削減しつつ、合理的に機械化を進めて生産拡大していくのをよいことと考える視点は、シャトーブリアンにはない。貴族でブルボン王政主義者であった彼は、工業発展や金融の拡大などを推進しようとするブルジョワとは社会観を一致させていない。失われていくもの、より過去のものに強く愛着する感性の持ち主だったので、工業においても一昔前の小規模の生産形態の維持へと、自ずと気持ちは傾いたに違いない。

シャトーブリアンが回想録のこの結論部分を執筆する前年の1840年に、ジョゼフ・プルードン Pierre Joseph Proudhon が『財産とは何か *Qu'est ce que la propriété?*』を出版しており、1841年4月には、財産に関する第二論文である『ブランキ氏への手紙 *Lettre à M. Blanqui*』を書いている。シャトーブリアンがこれらを読んでいた記録はないが、すでに見た所有の問題へのアプローチからも、彼がプルードンらと同じ問題意識を持っていたのは明白であり、さらに、レカミエ夫人などのサロンに出入りしながら、世間で話題になっている出来事や風潮につねに通じていたのは疑いがないので、プルードンの論調は少なくとも耳には入っていただろう。工場生産や労働問題についての議論は、すでに彼より若い世代が携わるところとなっていたが、フランス革命以前からのフランスを見続けてきた彼としても、それなりの視点を提示しておきたいと思ったに違いない。少なくとも、シャトーブリアンは、激変し続ける1841年時点の社会問題に対して問題意識を持つことを放棄してはおらず、その意味で、老いてもなお終わっていない、と言える。

「知性の拡大」がもたらす機械の進歩によって、「暇になってしまうのを余儀なくされる人々」や「ただ一種類の機械を動かすタイプの賃金労働者が、耕作や家事に関わる労働者たちの代わりをしてしまうこと」、「仕事を奪われた人々」、「知性がありながら、閑暇を強いられた情熱」などの指摘は、現代の視点から見ると、とりわけ目新しいものとは見えない。だが、逆に考えれば、現代であたり前に見られるこうした産業の問題や労働問題

に、1841年時点でシャトーブリアンがすでに注目していることには驚いておいてもよい。ナポレオン独裁下の1809年生まれのブルードンが言うのではなく、ルイ15世統治下の1768年生まれのシャトーブリアンが言うところに、18世紀からのフランス社会観察の継続が存在している。アンスイアン・レジームや革命の期間、その後のナポレオン時代、王政復古期などを見続けてきた目が、19世紀半ば近くの工業生産の問題や労働問題を見て、人類史的な問題として認識していることになる。

ここでは、シャトーブリアンの独特の自由論が展開されているのも興味深い。自由は力によって維持されるものであり、「仕事が力を作り出すゆえに」、力は仕事によってのみ維持される。ここで彼が用いている「仕事 *travail*」という言葉は、ラテン語からの流れで12世紀までは「苦痛」「労苦」などを意味し、近代的な「仕事」の意味が発生したのは15世紀以降である。ラテン語にも中世フランス語にも通じていたシャトーブリアンは、*travail* を「仕事」という意味で用いながらも、おそらく、「苦役」という意味合いも含めて考えていただろう。苦役だけが人間に力を与え、そのように生まれる力によってのみ、自由は維持される。したがって、苦役は極めて重要である、というふうに、貧乏貴族の末子として革命期前後の動乱を生き延びたシャトーブリアンは考えていたに違いない。未曾有の戦乱や内乱の中を生きてきた彼の場合、19世紀生まれのロマン派たちやブルードンのような新しい思想家たちが考える「自由」の概念とは違ったものを持っている。ましてや、現代の第二次世界大戦後の社会に考えられがちな「自由」とは全く異なっていると見るべきだろう。「苦役」と結びついたものとして、それにもみ支えられるものとしての「自由」の定義を持つシャトーブリアンの場合、「自由」は容易に旧約聖書の創世記と結びつき得ることにもなる。

彼は次のようにも書いている。

「蒸気機関が完全なものとなって電信や鉄道といっしょになる時、それは距離を消滅させてしまうだろう。旅をするのはもはや商品だけではな

い。それらの翼の用をなす思想も旅をするようになるのだ。国内の地方と地方の間ですでにそうなっているように、国々の間で金融や商業の障壁が廃される時、日々関わり続けている異なる国々が民衆の統合に向かう時、古い分離のあり方を蘇らすことなどできようか。

そのままトランプ大統領の政策批判になるようなことを、じつにシンプルに、すでに176年前に彼は書いている。誰よりも懐古主義的で、過去の形態に戻ろうとする衝動を持つことでは代表選手のようなシャトーブリアン自身が、「古い分離のあり方」を復活させることはできないと書いている。あらゆる領域において「距離」が消滅し、人も物もすみやかに移動するようになるばかりか、「思想」もすみやかな移動をするようになる。なにかが発想されたり構想されたり、考えられたりすれば、すぐに別の地域へと伝達されることになるわけで、ここでシャトーブリアンは、無限にグローバル化の進行していく近代の人類の運命を的確に認識している。若い時代に北アメリカのネイティヴ・アメリカンたちの集落を訪ね、文化人類学的な観察を行い、『アメリカ紀行 Voyage en Amérique』という旅行記に調査報告をまとめたこともあるシャトーブリアンとしては、もちろん、地方のこれまでのあり方の消滅、自らの形態を固守してきた独自の様々な文化の消滅、他と離れて個別に生存していこうとする人間たちのあり方の消滅なども射程に入れていただろう。

4 絶対的平等 *égalité absolue* を求める 社会改革理論への根源的な批判

《サンシモン主義者たち。ファランステール主義者たち。フーリエ主義者たち。オーエン主義者たち。社会主義者たち。共産主義者たち。統一主義者（ユニオニスト）たち。平等主義者たち》と名づけられた章では、シャトーブリアンは、絶対的平等 *égalité absolue* の実現を求めようとするあらゆる社会変革の試みに対して、根源的な批判を行っている。彼によれ

ば、そうした試みは、自然から来る不平等 *inégalité naturelle* を超克することはできず、結果的に、身体的隷属や魂の奴隷化をしか齎しはしない。

こうした批判は、フランス革命からナポレオン時代を経て王政復古期までを実際に生き抜いてきたシャトーブリアンの経験的な人間観察と社会観察に基づいているに違いない。ことに、ナポレオンやルイ18世の時代には外交官や政治家として権力の中枢に近かったり、中枢そのものだったりしたため、さまざまな党派の動静を間近に眺め続けてきた経験は、大きな人間理解の契機となっただろう。しかし、古代ギリシャやローマの政治哲学文献をはじめ、モンテーニュやモンテスキュー、サン＝シモン公爵からルソーなどに到るフランスの古典にも通じ、政治体制を中心とする歴史研究者でもあった彼ならではの、奥行きのある人間観にも由来していると見ておくべきだろう。

シャトーブリアンは、やや皮肉にこのように始める。

「個人での財産所有にうんざりして、政府を唯一の財産所有者にし、乞食になってしまった共同体に、個人ひとりひとりの価値に合わせて計量された分け前を配分しようというのか？ 誰が人間たちの価値を計測するのか？ あなたへの裁きを執行する力と権威が、誰にあるというのか？ これら、生きた動産たちの群れを誰が維持し、価値あらしめるのか？

労働が連帯してなされていくのを求めているのか？ だが、弱い者や病人、怠け者、愚鈍な者たちは、彼らの無能力が負担となったままの共同体になにをもたらし得るというのか？

なるほど、他の結合のしかたもあろう。株式会社などの賃金制を、製造業者と労働者の間の合資会社に替え、一方が資本と発想をもたらし、他方が彼らの製造技術と労働をもたらす。収入利益は共通に分ち合う。これがすっかり完成し、分配されるのならば、なるほど、それは素晴らしいことだ。もめ事にも吝嗇にも羨望にも逢着しないのならば、素晴らしい。しかし、たったひとりの参加者が意義を唱えるだけで、すべては崩れる。分裂と訴訟が始まる。このやり方の場合、理屈の上では多少はもっと実現で

きる可能性がありそうでも、実践に移してみれば、やはり不可能なのである」⁽¹⁰⁾。

シャトーブリアンの批判は、現実の個々の人間ひとりひとりに、どうしようもない能力差と性格差、考え方の差があるという認識から来ている。ある目的の遂行に対しては、それにふさわしい行動の採れない無能な人間や怠惰な人間が山ほど居り、様々な病人や虚弱者も居り、さらには、あらゆる状況下で自分の利益だけを巧みに貪ろうとする者たちも多数存在する。社会変革の基盤を作ったり支えたりする際に最重要な土台となるはずのこうした人間性そのものが、すでに、人間界では均一ではあり得ない。これに最低限の均一化を施し、人間資材として使える程度の質を維持しようとするれば、脅しと暴力による榨づけを恒常的に制度に取り込むしかない。無能者の能力をいくらかは伸ばし、怠惰な者を矯正することはいくらかできるだろうが、虚弱者や病人にも平等な賦役を課せば、彼らには死を強いることにしなければならないだろう。絶対的平等社会では、あらゆる労苦も絶対的に平等でなければならぬから、社会制度を支える根本思想上の矛盾を避けるためには、虚弱者や病人にこれが免除されてはならない。

シャトーブリアンから見れば、そもそもからして「理論の不可能性」に目をつぶって推進されるばかりの社会変革論の数々なのだが、本来、ブルボン王政と分かち難く結びついているはずのキリスト教から来る「道徳や宗教の言葉」が、王政やキリスト教を断罪し竣拒しているはずのこれらの「非宗教的社会制度」理論には混じっている、と彼は指摘している。つまり、あらゆる社会改革理論は、キリスト教をこそ基盤にしなければ構想され得ないということで、シャトーブリアンが皮肉な語り口になるのも故なしとしない。

5 良き共同体や良き社会の成立や維持の不可能性

シャトーブリアンが、さらに、社会主義的変革の不可能性の最大の根拠

として持ち出してくるのは、人間に、無限なるものや全体性を求める本質があるという点である。

「ここで、絶対的平等なるものについて、もう少し真面目な話をしておこう。この平等は身体的隷属をもたらすばかりでなく、魂の奴隷化をもたらす。これは本当に、個人の精神的肉体的な不均等さを破壊することしかないだらう。我々の意思は公共の団体の監視下に置かれ、我々の様々な能力が廃用処分になるのを目の当たりにすることになる。たとえば、無限や無際限を求めるといことは我々の本性である。私たちの知性や情熱に対し、所有期限のない財産を希求することを禁じてみるがよい。人間はカタツムリの生へと追いやられてしまうだろう。人間は機械に変えられてしまう。というのも、間違っではいけないのは、全なるものに到達する可能性や永遠に生きるという考えがなくなれば、到るところで虚無ばかりになるからだ。個人所有がなければ、解放される者は誰もいなくなる。誰であれ、所有物のない者には独立も自立もない。例外となる所有物のある現況条件下に生きるにしろ、共同所有の中に生きるにしろ、彼はプロレタリアか賃金労働者となる。所有の共有化は、社会を修道院のひとつに似たものにしてしまうだろう。その門で、儉約家でしまり屋の会計係がパンを配るのだ。相続される不可侵の所有だけが、我々の唯一の個人的な防衛手段である。所有は、自由そのものに他ならない。完全な服従を前提とする完全な平等は、最も厳格な隷属状態を再現することになろう。それはひとり人間を駄獣に、荷運び用の動物にしてしまう。そうして、強いられた行動に従わされ、同じ小道をいつまでも歩かされることになる」⁽¹¹⁾。

スイエスでさえ「所有自体は自然なものであり、私はそれを排斥はしない」と書いていたのだから、所有ということ、個人としての人間の生存に不可欠のものとして重視するシャトーブリアンの見解はけっして保守的すぎるものではなく、反動的なものでもないだろう。人間は、共有され得ない個人的所有を一定程度認めないと、人間であることさえできなくなる。これは人間理解において常識であり、基本中の基本であるはずだが、

道具的理性化した理性による社会改革の方法論上の追求は、これを無視して進行しようとする。

シャトーブリアンは、最初期の著作である小説『アタラ *Atala*』の中ですでに、北アメリカ大陸でのアメリカ・インディアンたちの共同社会の実験を描いている。ヨーロッパ人宣教師に導かれて、キリスト教を旨とする共産主義的共同体でアメリカ・インディアンたちが平和に暮らす話だが、この共同体は、他のインディアン部族の襲撃を受けて滅ぼされ、残忍な拷問の末に宣教師も火あぶりにされる。ナポレオンに注目され、外交官へと取り立てられる契機となった著作のうちの一作であるこの作品で、シャトーブリアンは早くも、人工的な共同体というものへの関心を示していたし、それが奇跡的に成功したとしても、必ず終焉を迎えざるを得ないことをも表現しようとしていた。この作品の母体で、より大きな大作である政治叙事詩『ナチェズ族 *Les Natchez*』では、社会の保守派も改革派も、善良な者も悪辣な者も、共同体も孤立者たちも、皆一様に滅んでいく様が描かれ、全編を徹底したペシミズムが覆い尽くしていた。思えば、最初期から最後の著作に至るまで、シャトーブリアンの関心事は、良き共同体や良き社会の成立や維持の不可能性をめぐる考察にあり、哀歌の執筆にもあったかもしれない。人がどんなに希求しても、どんなに理論構築に努めようとも、そのために身を挺し命を捧げようとも、断じて、良き共同体や良き社会を成立させないものとしての人間性のどうしようもなさ。これについての徹底した認識は、シャトーブリアンの全著作を通じての通奏低音であり、思想と言えるものだったかもしれない。

これは、啓蒙主義者たち、とりわけコンドルセ Condorcet のような急進的な啓蒙主義者たちが、どの人間にも付与されていると信じて疑わなかった人間の自己完成能力 *perfectibilité* の普遍性への疑いから来ている。個々の人間には、生まれつきの様々な能力差や身体的格差、教育では均等化し得ないほどの性格上の根源的な差異、意志力の差異などがあるという人間理解に立っているといえる。様々なプラスの能力ばかりか、様々なマ

イナス面をも含めての複雑多岐な多様性存在として、人間を認識し続ける態度であるといえる。こう見なす時、シャトーブリアンと同時代人だったサド侯爵 Marquis de Sade などの人間理解も同一平面に入ってくるようになる。

こういう考え方にに基づき、社会の要員となる人間たちへの画一的な扱いを否定し、あらゆるものを平等化・均一化・画一化しようとする方向性を持つ社会改革論を否定する態度は、ふつう、保守主義と呼ばれる。ヨーロッパの政治的保守主義の祖と云われたシャトーブリアンにおいて、著述の端々にこうした認識が滲み出るのは、当然といえば当然のことかもしれない。

注

- (1) Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, Conclusion, 3 Inégalité des fortunes. Danger de l'expansion de la nature intelligente et de la nature matérielle.* (Pléiade, Édition par Maurice Levailant et Georges Moulinier, tomeII, p. 918.)
- (2) Ibid., *Conclusion, 6 Saint-Simoniens. — Phalanstériens. Fourieriste. — Owénistes. — Socialistes. Communistes. — Unionistes. — Égalitaires.* (Pléiade, Édition par Maurice Levailant et Georges Moulinier, tomeII, p. 924.)
- (3) Ibid., p. 918.
- (4) Ibid., p. 918.
- (5) Ibid., p. 918.
- (6) Sieyès, *Qu'est-ce que le tiers-état?*, Champs classiques, p. 57.
訳文は、岩波文庫版『第三身分とは何か』(シイエス著、稲本洋之助・伊藤洋一・川出良枝・松本英美訳、岩波文庫、2011)、p. 36 によった。
- (7) Op. cit., p. 919.
- (8) 旧約聖書、創世記 3-19。ラテン語の引用はシャトーブリアン自身による。
- (9) Op. cit., p. 920.
- (10) Ibid., pp. 924-925.
- (11) Ibid., p. 927.

